

2019 (平成31) 年度
推薦入試
[法 学 部]
小 論 文 問 題

注 意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は六〇分である。
- 2 黒色鉛筆を使用すること。
- 3 解答用紙の所定欄に、氏名・受験番号を記入すること。
- 4 縦書きにすること。
- 5 下書きには、この用紙の余白を使用すること。
- 6 書き損じても、解答用紙は再交付しない。
- 7 この用紙は、試験終了後に回収しない。

解 答 要 領

解答は問題文中の設問の指示に従って、解答欄に適切に書くこと。

なお、句読点・かつこなども字数に加える。また、段落の初めの空きや、

段落の終わりの行にできた空きも、書いてあるものとみなし、字数に加える。

以下の「社説」を読んで、設問に答えなさい。

不正が起きた背景を検証し、社会全体で共有して、再発防止に役立てなければならぬ^①。

京都大iPS細胞研究所の助教(36)が昨年発表した論文のデータに、捏造(ねつぞう)や改ざんが確認された。本人は「論文の見栄えを良くしたかった」と話しているというが、結論そのものをゆがめめる重大な行いである。

今後は、実験経過を記録したノートの提出を徹底させ、チェックを強化するというが、それにも限界はある。不正は実績ある研究者にも報告されている。それぞれの大学や研究機関は、改ざんなどを起こしにくい環境づくりに取り組み、たとえ誤りがあっても発表前に正せる仕組みの整備を急ぐ必要がある。

今回の事件で気になるのは、問題の助教以外の10人の共著者が、不正を察知できなかったことだ。助教が一人でデータを解析し、グラフを作成したというが、みんなで生データを共有して検討を重ねていれば、気づけたかも知れない。分業化や細分化が進み、研究者同士がコミュニケーション不足に陥っていた可能性はないか。

iPS細胞を中心とする再生医療や創薬の研究に、国は13年度からの10年間で1100億円を投じる目標を掲げる。成果への期待が強い一方で、同研究所のスタッフの多くは通常5年間の任期付きで雇われている。

この助教も今年3月に期限を迎えるというが、就任してから論文を発表できていなかった。焦っていたとしてもおかしくない。もちろん、不安定な雇用環境や研究費獲得のための厳しい競争は、改ざんなどを正当化する理由にはならない。だが、不正がひんぱつする^aひとつの原因^②になってはいないか、議論を深めるべきだ。

倫理教育を充実させていくことも欠かせない。

ネットを通じて他人の論文を簡単にコピーでき、図表や画像もパソコンで気軽に作成できる。どこまでが許され、何をすれば不正に当たるのかという基本的な心得を、学生のころから身につけさせる必要がある。

ただ、「不正をするな」と繰り返すだけでは不十分だ。近年注目されるのは、「どんな研究者でありたいか」を考え、誇れる

研究者像に近づくことに価値を見いだす「志向倫理」の教育である。やってはいけないことを一方的に教え込むのではなく、内発的に「そんなことはしない」と意識づけさせるもので、グループ討論などの手法が有効といわれる。

さまざまなアプローチからの地道な取り組みが**かんようだ**。

(2018年1月26日 朝日新聞 朝刊「社説」)

設問

1. この「社説」に適切なタイトルを15字以内でつけなさい。
2. 傍線部 a 及び b を漢字で書きなさい。
3. 傍線部①の「再発防止」のために、この「社説」で示されている対策のうち、研究者だけでなく研究者以外の者も、その対象とすることを文中から14文字で抜きだして示しなさい。
4. 傍線部②の「ひとつの原因」として、この「社説」で示されている状態を、文中から23文字で抜きだして示しなさい。
5. この「社説」の内容をふまえて、あなたの考えを501字以上600字以内で示しなさい。